

羽衣説話の変容の研究

草双紙・タイ国仏教説話を中心に

A STUDY OF THE TRANSFORMATION OF THE HAGOROMO TALE
Centering on Kusazôshi and the Buddhist Tails of Thailand

Suwattana ONSIRI*

Hagoromo tales are well-known all over the world. They have from antiquity generally taken the form of a tale of a virgin wearing a robe of white feathers. In Japan too, besides popular transmission, we can see records of such a tale all the way back in the age of *Fudoki*. A certain human male discovers a celestial female who has come down from Heaven and is bathing on earth. He steals her feather garment and in the end is united with her. As time passed this standard form of the hagoromo tale was transformed in various ways according to the local beliefs, ethnic group, and local conditions of the places where it is found. In Japan though the standard version was by and large maintained it underwent many alterations in its opening and particularly in its conclusion. Diverse studies of it up to the medieval Nô drama *Hagoromo* have been carried out from many angles.

* スワッターナー・オンシリ タイ国チューラーロンコーン大学卒業後、天理大学研究生を経て、現在は東京学芸大学大学院修士課程教育学研究科国文学講座に在籍。専攻は近世文学。

However, it is difficult to find studies concerning the transformation of the hagoromo tale in the early modern period when literacy was spreading among the general populace. During the Edo period the arts flowered in many diverse genres, but in this paper I would like to deal particularly with the hagoromo tale as it is found in kusazôshi. I have investigated four versions of the hagoromo tale in kusazôshi up to now. These are the kurobon *Hagoromo* in three volumes date and author unknown, the kibyôshi *Share Moyô Tonda Hagoromo* in three volumes by Kitao Masanobu published in 1780, *Kumo Hikyaku Nidai no Hagoromo* in three volumes by Takezuka Tôshi published in 1801, and *Tenjin Hagoromo no Matsu* in two volumes by Yôsai Nanzan published in 1817. As none of them had yet been printed in block characters, I have first deciphered the script and then recorded their content and literary character as well as similarities to and differences from the original hagoromo tale. I have further considered the meaning of their transformations. Finally I have written of the hagoromo tale in Thailand. In the Buddhist country of Thailand from antiquity there have been many legends and tales connected to Buddhism and stories of the Buddha. To this very day generations of Thai people have cherished and inherited this tale with many of its original motives intact but taking the form of a story of one of the Buddha's previous lives. I would like to consider the form of the hagoromo tale in both countries while introducing the famous version of my motherland. I will be very gratified if this paper contributes even a little to deepening the mutual understanding of the two countries.

日本とタイとの間に共通している話の一つに羽衣の説話がありますが、日本の場合、中世の謡曲『羽衣』でこの話が洗練され、一貫した話型となって、周知のようにその影響は現在まで続いています。

タイの場合も13～16世紀頃、つまり日本の中世頃に羽衣説話は一貫した話型とされ、釈迦の前世物語として記され、「ストンシャードック」という名で、タイの民衆の間にずっと愛読されてきました。「ストンシャードック」の影響は様々なジャンルの文学作品だけではなく、芸術や舞踊にも及んでいます。そして、時代や作者またはそれぞれのジャンルの特徴によってその描写は多少違ってはいますが、釈迦に関わりがある話だと思われたせいか、「ストンシャードック」の話型がほとんどそのまま尊重され、内容の細部もそれほど変わっていません。これについては後に述べます。

ところで、日本では教育が初めて庶民のレベルまで普及された近世に入って、羽衣説話の話が驚くほど変容されました。本発表では江戸庶民の文芸の一つである草双紙の中における羽衣説話に関する作品について述べてみたいと思います。その内容が羽衣説話の一般的によく知られている話とかなり違って、意外性に富み、大変面白い展開を見せてくれるからです。草双紙について述べた後、日本の場合と違って、後世になっても内容はほとんどそのままずっと守られて継承されて来たタイの羽衣説話を紹介し、両者を比較することで両国の文化の源流や、相互関係を考える一つのきっかけとしたいと思っています。

それでは、はじめに草双紙の作品について述べてみたいと思います。草双紙はほとんど翻字がされていませんが、翻字されていない作品の中から羽衣説話に関するものを現在まで四作品見つけました。まず、①都立中央図書館加賀文庫蔵の黒本『はごろも』について述べてみたいと思います。梗概は次のとおりです。

人皇四十七代淳仁天皇の弟長屋王子は月食の時に生まれ、啞となり、山へ捨てられ、乞食になった。けれども、ある裕福な百姓の啞の娘をさし殺し、彼女のいきぎもを取って食べた後、たちまちものが言えるようになった。

一方、笛の名人の二人、弓削の道鏡と白龍がある日、笛を吹いていたところ天女がその音に惹かれて、三保に天下って、露に濡れた羽衣を松の枝にかけた。しかし、彼女の羽衣は通りかかった白龍に取られたため、仕方なく彼の家まで行き、ついに彼の先妻の子供を養育するようになった。

ものが言えるようになった長屋王子は道鏡の協力を求め、姉の称徳女帝から皇位を奪おうとしたが、失敗に終わった。逃げ出した長屋王子は旅人に変装し、白龍の家に泊めてもらったが、白龍と天女が羽衣について話しているところを盗み聞き、秘かに羽衣を奪い取って逃げた。

しかし、王子の跡を追って来た大臣の家来くめの八良が王子を切り殺し、羽衣を取り返した。天女は羽衣を返してもらったお礼に女帝達に霓裳羽衣の舞を舞いながら、国土円満の宝を降らした後、羽衣を身にまとい、天上へ飛び帰った。

作者は皇位継承問題をめぐる伝承世界の中に新たな構成を作り出し、羽衣説話と結び付けて展開していきます。藤原氏の讒言によって自殺させられた長屋王はこの話では長屋王子の名で、淡路廢帝と称徳女帝の啞の弟として登場しています。

そして、また面白いことに彼は道鏡の協力を受けて、女帝から皇位を奪いとうとしました。事実上、長屋王は淡路廢帝と女帝とは兄弟ではなく親戚の間柄で、しかも三人の中で一番年上でした。それに彼は女帝が即位する前に既に世を去っていたので女帝から皇位を奪い取るなどとはありえなかったのです。そして、歴史上、女帝に寵愛され、法王の位まで授けられた道鏡が女帝を裏切るということなどは考えにくいのですから、これらの趣向は全く作者の創作と言えましょう。

話の重点は長屋王子のことに置かれていますが、羽衣説話の要素もちゃんと作品の中で現われています。表面的には天人はただ白龍の先妻の子供を養育するだけの様子に書かれています。三丁ウ四丁才の挿し絵^①から見ますと二人の仲はそれ以上の深い関係にあることが暗示されています。つまり、天人は羽衣

を取った男の妻となったという原型の要素からは外れていない訳です。ちょっと違うのは男には天人に会う前に既に子供がいたことでしょう。

話の発端には民間伝承の天人女房型に属する『笛吹聲』の話を使って、天人降臨の理由を付しています。そして、男の名前が白龍であること、また、三保の松原という出会いの場、更に結末部に天人が霓裳羽衣の舞を舞って、国土円満の宝を降らせて天に帰るという三つの点で、謡曲の『羽衣』がこの作品に影響を与えていることが分かります。

次に黄表紙の『晒落しやれ模様もよう飛とん羽衣だはごらも』（安永9年刊、都立中央図書館加賀文庫蔵）について述べます。梗概は次のとおりです。

ある日、三保松という美男が行水していた。天人がそれに見とれて、通力を失い空から落ちてしまった。（この場面について資料No.2の上から二つ目の挿し絵をご覧ください。）三保松は天人を家に連れ帰り、妻にした。ある時、三保松はたわむれに羽衣を着てみると、雲が空から降りて来て彼を天上へ巻き上げた。天上では彼は天人達に口説かれ、大いにもてた。一方、地上に残された天人は生活に困り、結局乙女という名で芸者となったが、後白両という質両替屋に身請けされて妻となった。天上で毎日毎晩天人達の相手になった三保松は疲れ果てて、その上、焼餅を妬いた天狗にいじめられたためもう我慢の限界になって雷に頼んで下界に降してもらった。が、我家は空家となつて、お金に困った三保松は羽衣を白両の店に質に入れた。もちろん天人がその店にいるとは知らなかった。天人は自分が天の人であることを白両に明かし、羽衣を返してもらって、それを身につけて天上へ帰った。

この作品は羽衣説話に久米仙人の話のない交ぜにしたものですが、ここでは更に久米仙人の話を逆転させています。つまり、天人が若い美男の白い肌に見とれて、通力を失って地上に落ちて来たことにしているのです。そして、作者は天女を深川芸者にしたて、また美男も天上界にいる天人達に口説かれます。これは深川遊里の遊女達が客を口説いている行為を思わせませす。遊里というのは男にとって天国の様な所で、ちなみに遊里に働いている遊女も天国の天人の

様な人でしょう。作者はこの様に思っ作品の趣向にしたのではないかと思います。話の面白みはまだ天人が二回も結婚することにもあります。一般的な羽衣説話の話では、天人が一人の男と一回結婚するかもしくは再会型の場合、天上で再び結婚するという形になっていますが、この話では天人を芸者にするだけではなく、二人もの男と結婚をさせています。神聖な天人のイメージを変えながら諧謔味を入れるのはいわゆる黄表紙の「こじつけ」といえるでしょう。

内容の細部は確かに一般的な話と大部異なっていますが、謡曲『羽衣』の影響がこの話にもはっきり現われています。三保松、白両という男主人公の名前や結末部に羽衣を手に入れて身にまとった天人は「喜びの舞の袖打返して愛鷹山や富士の高嶺かすかになりてと舞かなで、さらばさらばというまに霞にまぎれて失せにけり」という描写は謡曲『羽衣』の言葉を少し変えて作品の中に生かしています。

次に黄表紙の『雲飛脚二代羽衣』(享和元年刊、都立中央図書館加賀文庫蔵)に移ります。梗概は次のとおりです。

三保ヶ崎の松原で天女が下着を洗濯している時、彼女の白い脛に見とれた天狗にさらわれてその妻となった。一方、天女の羽衣を拾った漁夫伯蔵は漁師をやめて、飛脚屋を始めた。

ある日、伯蔵はある大名の隠居の依頼を受け、長命の仙薬を求めに唐国へ飛んだが、途中で唐の巨人に渡り鳥と間違えられて、捕えられ、大王に献上された。半年後、見世物小屋に出され、日本の歌や所作事を演じて、大当りし大儲けした。後に解放されまた仙薬を求める旅に立ったが、今度は大鳥達に捕えられ、散々殴られ、羽衣の毛もぼろぼろに筆られてしまった。

飛べなくなった伯蔵は偶然天狗と天女の住む庵を見つけ、助けを求めた。天女に羽衣を返した伯蔵は天狗の情けで長命長寿の薬方書を貰い、日本まで送ってもらった。彼は大名の隠居に薬方書を渡し、褒美を数多く賜り、豊かに暮らした。

作者は冒頭部に久米仙人の話の趣向にし、羽衣説話の原型を変えて、天女は

羽衣を取った人間の男の妻とはなくなりました。その上、話の中では伯蔵が一番最初に天女の羽衣を手に入れた人間ではなく、その前に伯了という医者いしやがそれを初めて取った訳です。つまり、題名の『雲飛脚二代羽衣』どおり、主人公は羽衣を取った二代目の話なのです。

話の中では伯蔵が羽衣を利用して飛脚屋を開きました。文字どおり飛ぶ様に早く運ぶというのはこの職業の宿命ですが、飛べるものはその時代では鳥しかできませんので、鳥の様に翼があれば飛脚の仕事はもっと楽になるはずですが。羽衣は鳥の翼の様なものですから、作者はそれを連想して、作品の趣向にし、話を面白く展開して行きます。

飛脚屋伯蔵は太守の隠居の依頼で唐国の崑崙山の辰巳にある大虚靈山へ長命の薬を求めに行き、様々な困難を乗り越えた後、やっと不老不死の薬方書を手に入れました。書の内容は道徳をきちんと守り、隠徳を常に施すことです。ここまでの経過を考えますと、三蔵法師の話をおぼろげに思わせないでもありません。崑崙山は中国の西方にあると思われています。ということは伯蔵は中国に入ってからずっと西に進んでいかなければなりません。これは三蔵法師と同様西に進んでいく訳です。辰巳とは東南のことですから、西方から東南に進んで行くとそこにインドの東北部があります。崑崙山の辰巳にある大虚靈山は釈迦が説法したインドの東北にある靈鷲山を暗示するものであろうと想像できます。それ故、伯蔵という人物は白龍と三蔵法師の二人の人物像を投影させたと考えられるでしょう。作者はこの様に道教の思想である不老不死の薬の探求譚を三蔵法師の話と結び付け、当世の風俗を絵や文を通して描写し、滑稽味をたえず交ぜながら、本作品を描いたのです。

話の全体は原羽衣説話から大きく離れてしまいましたが、それは反って新味を生み出し、読者に新鮮さと面白さを与えたと思います。

次に合巻の『天人羽衣松』てんにんはごろものまつ（文化14年刊、国会図書館蔵）について述べます。梗概は次のとおりです。

三保松原で漁夫伯梁が天人の羽衣を取って家に帰った。彼は追いかけてき

た天人に迫ろうとしたが、不思議なことに全身が震え、力が抜け、そのまま眠ってしまった。

一方、清見判官忠知は伯梁の家に美女がいると聞き、褒美を約束し、天人を強引に召し出した。判官も又天人の美しさに惚れ、天人であることを知りながら、彼女に迫ったが、彼女の体から発した光にはね飛ばされてしまった。

天人の勢いを恐れた判官は伯梁から羽衣を取り戻し、天人に返した。そのお礼として天人は判官に不老不死の薬を与え、天に帰った。伯梁はその薬を盗もうとしたが、捕えられ、判官に説教された。悟った伯梁は出家し、清見寺を建立した。

この作品の内容は謡曲『羽衣』と『竹取物語』の二つをない交ぜにしていると思います。特に『竹取物語』の帝の求婚の段を思わせませす。身体から自然に光が輝く夫人は判官に情熱的に求愛されましたが、それを拒否して、月の世界へ帰って行ったという筋は帝のかぐや姫への求婚のところを窺わせませす。それに夫人が昇天する前に地上の男に不老不死の薬を与えるのは『竹取物語』のかぐや姫の昇天の段に見える要素です。しかし、知っておられるとおおり、『竹取物語』は一種の天人女房譚型です。つまり、この作品は同系の物を一体化したと言えましよう。今一つ面白いのは今までの作品ですと、天人は羽衣によって飛ぶ通力を得ますが、それがないと飛ぶこともできませんし、他の通力も現わせませせん。しかし、この作品では天人が自分を守る通力を持っていて、天人の神秘性を改めて感じさせませす。

以上、草双紙における羽衣説話の変容を見ましたが、黒本から黄表紙へ更に合巻へとその趣向発想の変化が大きく影響していることは明らかでしょう。そして、話の原点は謡曲『羽衣』であったことが分かります。

ところで、羽衣説話の形は謡曲『羽衣』によって一応の定着を見たと言えませす。この謡曲が登場した15～16世紀頃にタイ国では羽衣説話と似た話が仏教説話に見られます。そこで、これからこのタイ国仏教説話の羽衣説話の原型を

紹介してみます。

タイの羽衣説話の話がいつからタイ国民の間に語り継がれて来たかは想像できませんが、最も古く文献に記録されているのは13～16世紀頃であると思われます。この期間、タイの北部のチェンマイの僧が土地の昔話五〇話を集め、三蔵経に収められているジャータカ（本生話）547話の様式をまねて、パーリ語で書き、『パンヤーサシャードック（タイ語発音） Paññāsa Jātaka（パーリ語発音）』という名を付けました。^② 羽衣説話はこの『パンヤーサシャードック』の全五十話の第二話で、「ストンシャードック Sudhana Jātaka」という名で呼ばれています。^③

この「ストンシャードック」の原話はインドから伝わった仏教の経典『ティッパヤーワターン Divyāvadāna』の中にある「スタナグマーラーワターン Sudhana kumāravadāna」の話であると思われます。その理由は内容の全体的な雰囲気や主な登場人物、地名などを見ますと、タイの「ストンシャードック」のそれらと非常に似ているからです。

ところで、「ストンシャードック」の話は実は複雑で、次のような一大仏教説話を構想しています。

現在物語（釈迦がどのような理由で前世に起ったことを物語ったかを説く部分）

過去物語（釈迦が菩薩の化身として人間であった時の物語を説く部分）

結合（過去物語の登場者が現在物語の誰に生まれ変わったかを説く部分）

羽衣説話の内容を語る部分は上記の②、つまり過去物語、にある。

今回の発表では羽衣説話の要素を持っていると思われるところのみを取り上げます。ここでまずタイの羽衣説話の粗筋を述べて、その後、日本の羽衣説話の一般型との共通点・相違点を述べます。

- ・ウドンパンチャーン国には菩薩が王妃の胎内に宿り、生まれてからストン王子と名付けられた。
- ・一方、この国の池に住んでいる竜王は隣国の僧に殺されそうになったが、獵

師に助けられた。

- ・そのお礼に、竜王は獵師を竜の国で七日間もてなし、宝石を与え、人間界に送り帰した。
- ・獵師は隱者の教えにより、竜王から竜の輪を借りて来る。そして、池で水浴している天のカイラート国王の七人娘の末っ子マノーラー姫をその輪で捕まえて、彼女の翼と尾を取った。
- ・獵師はマノーラー姫をストーン王子に献上し、王子は姫と結婚した。
- ・王子の留守中、姫は司祭者のたくらみにより殺されそうになったが、翼と尾を取り戻せたため、それを身に付けて、天のカイラート国へ飛び去った。
- ・帰還した王子は姫の教えた方法に従って、七年七ヶ月七日かかって、やっと姫の住むカイラート国に辿り着いた。
- ・王子は姫の父、カイラート国王に難題を出されたが、全部克服したため、再び姫と結ばれた。後、二人は人間界に戻り、生涯幸せに暮らした。

日本の一般型と類似していると思われる点を整理して申し上げますと、次のとおりです。

- 一人間の男が神の教えによって池で水浴している天女を発見して、彼女の羽衣（タイの場合は翼と尾）を取った。
- 一天女は後、羽衣を取り戻し、それを身につけて、天へ帰る。
- 一夫は彼女の教えた方法に従って、天まで追って行った。
- 一夫は彼女の親に難題を出されたが、全部克服したため、再び結ばれて幸せに暮らしたというところです。最後の部分は日本の天人女房譚の難題克服型と共通しています。

類似点から見ますとタイの羽衣説話の話の細部は確かに日本とは違っていますが、この説話を成す重要な要素がちゃんと整っていることが分かります。

そして、相違点で今注目したいところを二つ挙げます。次のとおりです。

- ①タイの話の前半である獵師が竜王の命を助けて、そのお礼として竜の国まで招かれ、もてなされて、宝をもらって人間界に連れ戻されたという話は日本

の話には見られません。

②タイの場合、天女を最初に見つけた男、即ち獵師はそのまま彼女を妻にしたのではなく、別の男、即ちストーン王子に上げたところです。

相違点の①は浦島伝説の様な異郷訪問譚などと共通している部分もありますが、違う点も少なくありませんので、同系のものだとは言えません。

そして、②のところは獵師はそのままマノーラー姫を自分の妻にしてもおかしくないでしょうし、実はそれが自然ではないかと思いますが、結局タイの場合、獵師は脇役として主役のストーン王子にマノーラー姫を引き合わせる人に過ぎない訳です。けれども、これによって、物語がその後、ずっと長く続き、一種の冒険物語となって行きました。というのは主役のストーン王子がマノーラー姫の許に辿り付くまで七年七ヶ月七日もかかって、様々な危険や困難を乗り越えたり、姫と会ってからまた難題を出され、それらを克服したりしなければならなかったからです。これらの経過はおそらく菩薩の偉大さを強調する目的に応じるために、それにふさわしい内容を調える必要があったからだと思います。

13～16世紀頃に釈迦の前世物語とされて以来、このタイの羽衣説話は時代が変わっていても内容はほとんどそのままずっと尊重されており、このことは即ち国民の仏教への厚い信仰心を反映するものだと言っても過言ではないと思います。しかし、一方、日本の近世の庶民文芸の一つである草双紙の作品にはタイとほぼ同時期に羽衣の説話を題材にとった謡曲『羽衣』を意識しながらも内容を自由に変え、宗教性にこだわらず、大衆に迎合する意図を窺い知ることができます。

この様に同系の話でしかもほぼ同時期に話型の骨組が成立したと考えられる日本とタイの羽衣説話は互いに共通点を持ちながらも、それぞれの時代や信仰精神・社会背景などによって大きな相違点を生み出した訳であります。

ところで、今一つ仮説として提示しておきたいのは両国の羽衣説話の原流についての問題です。

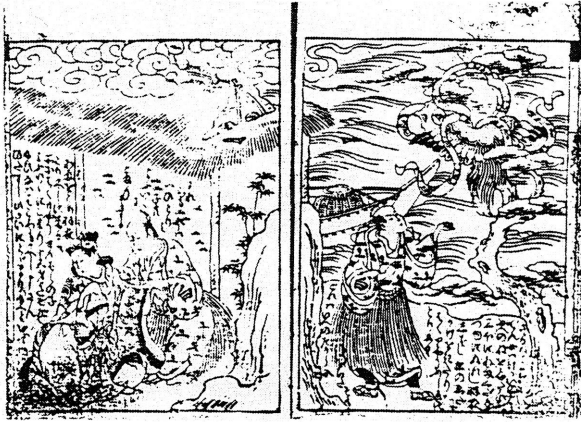
先ほど述べたとおり、両国の話には確かに大きな相違点を持つてはいますが、それぞれが全く違う原話から来たものだと考えるのは早計ではないかと思われます。一般では日本の場合、羽衣説話の原流は中国で、タイの場合はインドであると思われていますが、タイの「ストーンシャードック」の原話が収められている『テッパヤーワターン』は実は仏教の伝播と共に東南アジア以外に、東アジアにも入って来たのです。J.K Nariman氏の『Literary History of Sanskrit Buddhism』^④によりますと、紀元265年に『テッパヤーワターン』の一話が中国語に訳されました。それによって、タイの羽衣説話の原話である『スタナクマーラーワターン』も中国に入った可能性があると思われます。それに富田竹二郎氏によりますと^⑤中国の雲南省西双版纳の傣族にも『召樹召』という名で同系の話が古くから存在していますので、この点からもインドの話型が中国に伝わったのではないかと言えるでしょう。

しかし、この話は古い時代から日本に伝わったかどうかは分かりません。あるいは入る前に中国で変容されてから入ったとも考えられます。もし本当にそうであれば、両国の羽衣説話は同原話から来たものとなる訳です。

そして、本発表で述べたとおり、様々な状況によって、一方はずっと話型を守り続けていますが、一方は途中で多様に変容された訳です。

この様に私は推測しておりますが、実際はどうであるかは改めて今後の研究に待たなければならないと思います。

①黒本「はごろも」3ウ4オの挿絵



②『バンヤーサシャードック』、タイ国国立図書館編、シラバンナーカーン出版社、1956年

③タイ国国立図書館所蔵「ストンシャードック」のタイ語訳

สุชนชาติก

๓๓

พระกัณฐ์ปฤชาจึงบอกว่า คุณพราน ส่วนไหนใครจะสร้าง
 ไร่ราไม่รุ เห็นมือข้างนี้ก่อนเรามาอยู่ หมุกินรีขุมมาเดินหน้าใน
 ธรรมทานอยากคองไม่ยื่นแอบอยู่มิระ กัณฐ์ได้เห็นขมเด่นเป็น
 วิชา นายบุญชริกพรานไพร ด้ใจไปแอบขุม ณ พุ่มไม้ริมขอบ
 ธรรม์ อันนั้นเป็นอันมรดกมือไบต์ขุมลับหาค่า ผูกกันรู้ทั้งหลายเคย
 มรดกหน้าธรรม์สวนอุทยาน

คราวนั้น เจ็ดนางกนิรีเป็นธิดาของท้าวทรมารอยู่ที่ภูเขา
 โคราส ด้ฟ้าบวิจารพนหนึ่งบินมาโดยอากาศ ครั้นถึงธรรม์สวนได้
 ะกลืนดูเด่นหน้า บางว้ายบางคว้างว่าและชมรับรองตามดบาย ครั้น
 ะบายชวณกณณินฉายบินกลับไ พรานบุญชริกก็ด้เห็นแด้กฤ
 กรรมพิศวงด้วยคณขงไม่เคยเห็นแแต่ก่อนจึงคิดว่า นางกนิรีเหตุนี้
 ะนิกหนา ทำไฉนเราจะไ ไปถวายเป็นธิดาชายาพระสุชนกมาร
 ด้ละลวกันวัดนาการกลับมหาพระคยต์ เมื่อจะถามความนณะ
 พระฤชา ด้กัถ้วพระคากาน้ำ

ทิสวา ตหิ อีสว กิณรีโย คณา พหุ
 คุวิ เว พรหิ มหาเสฏฐ กถิ ลทฐามิ กิณรี
 คะระอ ไซ้แแต่พระวรฤชาผู้มีคังอันประเสริฐ ไซ้พาเจ้าได้ไปเห็น

- ④J. K. Nariman, 『Literary History of Sanskrit Buddhism』 Delhi : Motilal Banarsidass, 1972
⑤富田竹二郎編、『タイ日辞典』、養徳社、1987年

討議要旨

小西甚一氏から次のような示唆があたえられた。

一つの話がそのままの形で、文献を通して外国から日本に入ってくるということも考えられるが、その他に、もっとそれをバラバラにして、個別のモチーフが伝来するというのも考えてよい。羽衣伝説の他に、天人女房の話などを考えても、ストーンシャードックのある話しが仏教を通じて入ったということだけでは説明しきれないのではないか。ドナルド・キーン氏から教えられた、「フェードル」と「玉手御前」の問題、中国の新彊省にあるという「竹取物語」の類話などを考えても、書かれたもの以外、口伝えにあちこちに伝わっていくということを、もっと重視していかなければならないのではないか。

またダイクストラ・好子氏からも、メラネシアに羽衣伝説と非常に似た話しが在る、との助言があった。